

特253

926

同志會調查部著

日獨伊軍事同盟の運命



大日本防共同志會小冊子第八輯

日獨伊軍事同盟の運命

大日本防共同志會調查部



表紙の説明

(昭和十二年十一月廿五日日本會館落成記念に作成せる表紙、日守子實三氏作)

北豊の雲山彦山の山伏に、木練坊は臥行の一千日、三年目に初めて立上つて大欠伸をした。横に寝たばかりの三年間と云ふ苦行の一種が、修驗道に有つたものと見えます。立上つた木練坊、臥行千日の功力の程を試めそうと大の生木を二本揃み寄せて繩の如くに撚り合した。繩の如くのまゝでこの二本の木は繁つて居ると云ふ。日獨伊三國は枝である防共協定と云ふ偉大なる力で親善へと撚り合はされて然もまた――榮え行く將來を祝福してこれを作る。作者識。

日獨伊軍事同盟の運命

目次

- 一、國民の關心は何故、日獨伊軍事同盟の問題に注がれたか……………一
- 二、國民の關心は疑惑の念に驅られてきた……………六
- 三、政府は國民にその敵を明示せよ……………九
- 四、英・ソは蔣介石政權と共にアジアの敵だ……………一三
- 五、盟邦獨逸ヒットラー總統の聲を聴け……………一五

- 六、伯林・羅馬樞軸の結成……………二八
- 七、獨・伊兩國は新世界秩序確立を目指して今、新ヨーロッパの建設に着々成功してゐる……………二〇
- 八、支那事變は新世界秩序確立を目指す新東亞建設のための一大聖戰である……………三
- 九、英米との妥協斷じて許さず……………三
- 十、日獨伊軍事同盟への必然……………七

以上

日獨伊軍事同盟の運命

一、國民の關心は何故、日獨伊軍事同盟の問題に注がれたか

現在國民の眼は等しく「日獨伊軍事同盟」問題に集中されてゐる。

五月一日付讀賣新聞は、「ヒ總統の演說全面支持、英米干涉の否定悉く同感」と題し、わが態度に對し河相外務省情報部長談として次の如き記事を掲載した。

「廿八日アドルフ・ヒトラー總統は全世界の視聽を一身に集めつゝ滔々數千言の大演說を試みドイツ帝國の確乎不動の態度を中外に宣明した。就中、英のバレスティン政策と米の中南米政策とを各々一例にとり英米兩國の國際干涉權をいと短かき言葉を以て完全に否定した點は吾等にとり最も共鳴を呼ぶものである。米國

はわが國に對し支那における門戶解放、機會均等を要求してゐるが、それならば中南米に就ても同じく門戶を開放すべきではないか。自國の場合においてはモンロー主義をとり極東に對してのみ國際干涉權をふりまはすことは斷じて吾々の容認し得ざるところである。英國についても同様のことがいへる。これら世界最大雄圖をもつて自任する二・三の國のみが過去廿年間世界を無理に中央集權的に規整しようとして法律の申し子たる一箇のロボット機關を背後より操縱して專恣を逞しうしたことであらうが、眼に見えざる宇宙の最高精神は今や吾等に世界政治に地方的分權機構の結成を命じてゐる。世界はその機構の下に進歩と繁榮と友愛による結合の道程を辿りつゝやがて世界一家の永久平和に到達するであらう。更にまたヒトラー總統は日獨伊三國に緊密なる關係を樹立することを高調してゐるが、防共協定を作つたのは抑も吾々日獨兩國であつてその後イタリアの参加を見て世界一の一大勢力となり滿洲西三ヶ國の参加を経て吾々の陣營は益々擴大の一

路を辿りつゝあり今後如何なる曲折を経ようともその強化を見んとしつゝあることは疑ひの余地なしと信するものである」

又、同日の都新聞は「ヒ總統演説・帝國の見解宣明」の題下に、外務省情報部長談として、

「……更に今後如何なる曲折を経ようともその強化を見んとしつゝあることは疑ふの餘地なしと信する、今日日本は東亞に未曾有の聖戰を敢行しつゝあり、この成果こそ世界一大家族への一道程である、然るに英米の諸國が今なほ世界の指導者面をして東亞の事に干渉し依然として東亞を半植民地の状態に留め置かんと企て居ることは日本の最も排撃する所である、東亞の門戸開放を要求するならば吾々も亦、中南米、アフリカ、ヨーロッパの門戸解放を要求するであらう、彼等が東亞のリーダーシップを自任する限り協調はあり得ない」

と述べてゐる。

更に五月三日付東京日々新聞夕刊は、地方長官會議に於ける平沼首相訓示の要旨を掲げ、「獨伊との提携強化」の項に於て、

「……防共によつて結ばれた盟邦獨伊兩國が、當初より我聖業に共鳴して支持を吝まざることは我々の深く多とするところで、これ等兩國との關係は今後益々緊密強固ならしめ一層その効果を擧ぐるの必要を痛感する次第である。」

と記載し、五月九日付東京朝日新聞は、「英ソ提携輕視し得ず防共協定を更に強化」の題下に、同月八日九段偕交社に於ける全國各地方長官招待會の席上においてなされた有田外相訓示内容を次の如く發表してゐる。

「……此の如き急速なる獨伊の進出に對抗して英佛は之が包圍陣の結成に乗り出しチエンバレン首相は三月三十一日對波蘭援助聲明を行ひ、更に四月十三日にはルーマニア及びギリシャに付き同様の援助聲明を行つた、更に最近はソ聯邦をも之に引入れんとして協商中の模様であるが、その東洋に及ぶと及ばざるとに拘ら

す英ソの提携は日本として之を輕視することを得ないのである、かくして東歐及びバルカンに於ける獨伊對英佛の勢力對立の關係は俄に逆賂し難いものがあるが日下の所急速に事態が最惡化するものとは考へられないのである、而して帝國と致しては過去の經驗並に今日の事態に鑑み日獨伊防共協定を更に一層強化し、以て帝國獨自の自主的立場に立ちつゝ此の緊迫せる國際狀勢に對處して行く所存である。」

斯くの如き各新聞の報道と、所謂「歐洲情勢對策」に關する五相會議の頻々たる開催は、彌が上にも國民の日獨伊三國防共協定の緊密強固化問題に對する關心を昂むるに至つた。

五月二十一日、全國各新聞は一齊に右の問題に關し、内閣書記官長談の形式を以て次の如き聲明を發した。

「歐洲情勢對策に關し考究中のところ廿日の五相會議において意見の一致を見た

り」

右の聲明は、極めて簡單にして、その内容に關しては詳細を知る由もないのであるが、前記の如き屢次の政府當局者の意向より推して、日獨伊三國の軍事同盟締結を意味せるものとして竊かに國民は、我國政府の對歐洲劃期的外交國策樹立の具體的發表を期待した。

二、國民の關心は疑惑の念に驅られてきた

時恰も、五月二十二日、獨伊兩國は、ベルリンに於て獨伊親善同盟協定を調印し、今後兩國は絶えず政治的協力を行ふこと及び完全なる軍事的結合の二大原則に立つ全文七ヶ條の強力且つ廣汎なる協定を結び、西歐諸國の霸道政策遂行を阻止し「世界最大雄圖をもつて自任する二・三の國のみが過去廿年間世界を中央集權的に規整しようとして法律の申し子たる一箇のロボット機關を背後より操縦して専恣を逞うしたる」

ヴェルサイユ條約體制に最後の止めを刺さんとするの壯圖に進發した。

然るに我國政府は之が協定成立に關し、平沼首相談の形式を以て、

「茲に獨伊同盟の締結を見たることは現在の國際情勢に處し世界平和確保の見地より友邦として欣幸とするところである、我邦としては世界平和のため愈獨伊兩國と緊密なる連繫を保持し三國關係を益す密接鞏固ならしむることを期する次第である」

と述べ、又同時に、外務省情報部長談として、

「……今や帝國外交の基軸は共產主義撲滅を目的とする防共協定に置かれて居り右協定の精神に於て獨伊と緊密なる提携を爲すにあることは動かすべからざる國策である。従つて防共の盟邦たる獨伊兩國が本條約の締結に依り其關係を全面的に完整し鞏固なる陣形を造るに至つたことは帝國として欣幸に堪へざる所である」

と發表した。

之を見た國民は、さきに屢次に亘る政府の發表せる日獨伊三國防共協定強化の意味が斯くの如き内容をもつてゐるものであることを初めて知るに至つたのである。

即ち防共協定の目的は單に共產主義の撲滅にあつて獨伊との提携の如きは右協定の精神を條件とする範圍内に於てのみ許さるべきであつて、この範圍を超えた三國樞軸強化の如きは全然問題外であると云ふ印象を強め、こゝに於て國民は支那事變勃發以來數次に及ぶ政府聲明と之とを想起して、寔に啞然たらざるを得なかつたのである。

平沼首相が第七十四議會に於て、我國々民精神の本義を説くにあたつて、所謂全體主義と皇道との相違を指摘したのは、既にその當時より獨伊との武裝化的提携を避けやうとした底意あるものと解せらる。

之によつて果然、獨伊軍事同盟反對論者即ち英米妥協に傾く有識者の一部は、時刻れりと、一方、全體主義と皇道との相違を強調しつゝ、他方之を論理の武器として歐

洲問題より離反への一路に國民を誘導せんとするの舉を敢てするに至つた。

何となれば、平沼首相の斯る主張は假りに一步を譲り、日本精神の眞義を明らかにせんとの意圖に出でたるものであつたにせよ、その結果は、我國と獨伊との接近を希望せざる徒輩をして、歐洲の紛争に巻き込まれざる所謂「自主外交」の提唱をなさしめる好個の口實と機會とを與へたからである。

かくの如き政府の態度と、之を利用する英米妥協論者の言動とは、一面に於て國民精神總動員の強化が提唱され乍ら、その實に於ては國民精神の歸趨を迷はしめ、他面、支那事變の根本的解決の前途を暗澹たらしめ、社會不安を愈々増大せしめるの原因となつた。

三、政府は國民にその敵を明示せよ

惟ふに今次の支那事變は、平沼首相が去る五月八日地方長官會議に於て時局對處の

指導方針に關して述べたる訓示中に、

「今次の支那事變は、世界の情勢と密接なる關聯があり之と切り離して解決が出來ない。従つて、從來の觀念による現状維持的の方策によつては解決は期し難い」

（五月九日付都新聞夕刊）

と指摘せるが如く、之を單なる東洋のみの問題として取扱ふことは全く根本的誤謬といふべく、今日の東洋の問題は同時に西洋の問題であり、ヨーロッパの問題は即ち東亞の問題である。即ち今日ヨーロッパに躍動しつゝある獨伊樞軸の歐洲新體制への巨歩は、過去の英佛中心の舊體制より被壓迫國家群を解放せんとする新世界秩序建設への聖戰であり、東亞に於ける今次の支那事變も亦、英米佛ソの桎梏より虐げられたる亞細亞諸民族を解放し、新世界秩序體制確立への前提たる新東亞建設を志す一大聖戰である。

我國は現在、形としては蔣政權を當面の敵として戦つてゐるのであるが、その實質

に於ては支那民族統一運動を巧みに利用せる英佛の帝國主義及びソ聯の赤色帝國主義との結集せる霸道國聯合軍と闘つてゐるのである。

従つて事變の究極的目的は支那に於ける西歐體制の打破そのものであらねばならぬ。

英佛ソの極東經略史を茲に繰り展げるまでもなく、日英同盟を結んだあの同じ英國が、歐羅巴大戰後、我國の國力が東亞に於て動かすべからざる地位を確保せんとするの勢を見るや忽ちその態度を一變して、或はワシントン會議に於て、或はロンドン會議に於て、先づ我國海上勢力に對して制肘を試みたるが如き、或は又、經濟上に於ては、英帝國領植民地自治領より我國製品の輸出しを策したるオッタワ協定の如き、外交戰に、經濟戰に凡ゆる手段方法を講じて我國を壓迫し來つたことは吾人の斷じて忘る能はざるところである。

然るに、之等をもつてしても猶ほ且つ我國の發展を阻止し得なかつたのみならず却

つて我國運の伸張するところ盟邦滿洲國の建國となり、亞細亞復興の礎石はここに嚴然と築かれるに至つた。

茲に於て老獪なる英國は、他國を誘ひ國際聯盟なる「法律の申し子たる一箇のロボット機關を背後より操縦して專恣を逞しうし」、我國に壓力を加へんとしたのであるが、「眼に見えざる宇宙の最高精神」は、斯くの如き不合理極まる策謀を足下に蹂躪し、我國の堂々たる國際聯盟脱退の宣言に接するや、一轉してソ聯を誘ひ蔣政權を籠絡して之を前面に押し立て、其の迷彩下に排日包圍陣を形成したのである。

所謂、リースロスの幣制改革は、支那をして英國の經濟的植民地たらしめ、之と共に戰線を張れるソ聯・コミンテルンの指導に基く抗日人民戰線の結成、更に西安事件を契機とする國共合作は、蔣政權を驅りたてて從來の「一面抵抗一面交渉」の對日政策を放棄せしめ、一路全面的武裝抗日に狂奔せしむるに成功した。

その所産たる支那事變勃發するや、我國は現地解決、不擴大方針を以て之に臨んだ

が、時既に全支には英ソの陰謀に基く排日抗日の組織運動は全面的に浸潤し、蔣政權は愈々機至れりとなして戦線擴大の方針に出で、或は北支に或は中支に我國勢力の驅逐に全力を傾倒するに至つた。

かくて戦線は愈々擴大し、長期に亘つての全面的衝突となつた。その影に老獪なる英國と陰險極まりなきソ聯、之に追従するフランスの蔣介石を操る姿を吾人は今日まで明瞭に見せつけられてゐる。之等の國の力こそが、蔣政權をして國土の三分の一、兵力の半を失ひ乍らも猶ほ依然として執拗なる抗戦の態度をとらしめ、又その首府を失ひ、貿易港の凡てを封鎖されたる慘澹たる状態にあり乍らも、その法幣の對外的價值を依然として持續せしめつゝある所以である。

四、英・ソは蔣介石政權と共にアジアの敵だ

事變勃發後に於ける英ソ兩國の援蔣抗日の事實について、その顯著なるものを指摘

すれば、吾等は先づ昭和十二年八月二十九日國民政府發表によるソ支不可侵條約締結を擧げなければならぬ。

更に同年十月十六日、英國は米國を語らひブラッセルに於て九國條約會議開催の招請を發し、十一月十五日我國を侵略國として所謂對日宣言案を可決したるが如きは寔に英國の惡辣なる仕業なりと謂ふべきである。

其他、英國の揚子江航行權問題、ヒューゲッセン事件、英將校スパイ事件、英軍艦の武力威嚇事件、最近數次に亘る租界事件等々、數へきたれば殆ど枚舉に遑がない。殊に租界問題の如きは我占領地域内に公然、蔣政權の策謀根據地を提供しつゝあるものとして斷じて看過し能はざるものである。

就中、最も許すべからざるものは、兩國の武器援助と英國の法幣支持である。即ち昨年十二月、英國は蔣政權に對し一千萬磅の借款を借與したと傳へられ、米國亦二千五百萬弗の對支クレヂットの設定に應じた。更に英國は、本年三月法幣安定資金とし

て、五百萬磅を設定し、専ら蔣政權の經濟的援助に努めた。

之によつてみるも、今次の支那事變は、蔣政權を差し挾んでの英國との戦ひであり、之と協力するソ聯との戦ひであると斷せざるを得ない。

さればこそ政府は、斷乎として今日その態度を決し、國民に我等の敵を明示しなければならぬ。

現在極めて不徹底なる態度を示しつつある政府の態度こそが、新東亞の建設を絶叫しながらも、内、國民精神の歸趨を迷はしめ、時局認識を強調しながらも、その認識を完からしめず、徒らに支那事變の解決を澁滞、遷延せしめてゐるのである。

五、盟邦獨逸ヒツトラー總統の聲を聴け

轉じてヨーロッパの情勢を見るに、かのヴェルサイユ條約體制による英佛中心の獨逸包圍陣は、果敢に之を破碎しゆく獨逸の盛り上る力と、之に協力する新興伊太利の

共同戦線の前に脆くも崩れ、今や老大国英國はフランスと共に、徒にその破局の前夜を悲しむのみ。

ヒットラー獨逸國總統は、ナチス政權第六周年の去る一月三十日、國會に於て過る六年を回顧しつゝ、歴史的獅子吼を試みたのであるが、その中に於て、

「大戰後ウイルソン米大統領の提示した十四條の原則は媾和條件としてドイツに負荷されたが、この中には民族自決の根本原則が包含されてゐる。民族は外交の如き人爲的措施により一國より他國に移さるべきものではなく神聖なる自然の權利がその政治的運命を決すべきものである。聯盟國は、この民族自決權を自國に都合のよい場合にだけ適用し、黒人に對しては民族自決權を主張し乍ら、ドイツ民族に對してはこれを拒否したのである。之が昨年一月十九日、余をして昨年中に六百五十萬のオーストリア人の爲に、この權利を獲得せんとした決意を固めた理由である。かくて豫期以上迅速に獨逸合邦の實現を見るに至つたのである。チエ

この問題の發生した際もドイツは同様動員を行つたが獨逸合邦當時と同様の効果を收めた。然し若し列國が、これを以てドイツが武力的壓迫を以て他國を脅迫したと爲すならば、これは惡意を以て事實を歪曲したものと云はざるを得ない。ドイツは第三國に對しては何等脅威を與へず第三國の干涉に對し自衛行爲に出たに過ぎない。ドイツ人だけに關係する問題に就て將來歐洲諸國がこれに干涉を加へ國內問題の解決を阻害されるのを甘受し得ない」

と述べ、更に四月二十八日國會に於て、

「……獨逸合邦の實現により余は、ヴェルサイユ條約が七百五十萬のドイツ人に對してなした不正を是正した。彼等七百五十萬のドイツ人は、欺瞞により民族自決の權利を奪はれてゐたのだ。ボヘミア、モラヴィア（舊チエコ）をドイツに編入したのは兩地方に四百萬のドイツ人が居住してゐるほか兩地方はドイツとの緊密な經濟的協力なくしては存立を續け得ぬ故であつた」

と絶叫し、ヴェルサイユ條約體制の不合理を論破し、

「獨逸は對獨強迫政策及び對獨包圍政策が依然續けられることを之以上容認しないであらう」

と四月一日ウィルヘルムスハーフェンに於て英獨海軍協定の破棄を示唆し、四月二十八日遂に英獨海軍協定、獨波不可侵協定の廢棄を宣言した。

六、伯林・羅馬樞軸の結成

吾人は茲に、獨伊兩國接近の原因を検討するの必要に迫られる。

由來、獨伊兩國は、歐洲大戰後、一方は戰勝國として、又一方は戰敗國として、一致し得ざる方向に向はなければならぬ狀況にあつたにも拘はらず、その兩國に共通する現状打破への必然性は、兩國をして當然同一歩調に進ましめるの運命にあつた。

即ち英佛伊三國は、戰勝國として戰敗國獨逸を壓縮せしめることに常に努力する形

をとつた際も、之が緩和、庇護の態度に常に出でたのは伊太利であつた。

然るに、この緩和、庇護の態度に出でた伊太利も、一度埃伊國境問題（ブレンナー國境問題）に觸れるや斷乎として英佛兩國を差し措いても之が反對氣勢を獨逸に對して示した事實は、獨の南進政策を恐るゐるの結果に他ならなかつた。

換言すれば、この事實は、伊太利自體の現状打破的特質と獨逸のそれとの衝突を物語るものである。この意味に於ける抵觸の最惡點に達したのは、一九三五年三月のストレーザ會議、並に同年七月に於ける埃首相ドルフス暗殺事件に示されてゐる。

然るに同年十月、エチオピア問題勃發するや、英國並に國際聯盟は眞向から伊太利の行動を非難し、遂に經濟封鎖を實行するの舉を敢てするに至り、フランスも亦、一度は伊太利に對し諒解を與へて置きながら、問題の進展すると共に、遂にその本質を暴露して極めて曖昧不徹底なる不信的行動をとるに至つたことは既に周知のことである。

ここに於て、伊太利は敢然、エチオピア問題を契機としてその本質に還り、所謂「安

全保障態勢」より脱却し、獨逸と接近するの機運を醸成するに至つた。

之に對して獨逸は、從來獨伊兩國間に於ける唯一の難問題であつたブレンナー國境問題を伊太利に讓歩し、以て南下政策を斷念する好意を示した。

かくて伊太利は専ら地中海制覇に、獨逸は東進政策に邁進するの所謂「伯林・羅馬樞軸」が確立するに至つた。

さればこそ、昭和十一年十一月二十五日、日獨兩國間に締結せられたる防共協定が翌十二年十一月六日更に伊太利の欣然たる參加となり、「東京・伯林・羅馬」樞軸としてその發展を見る至つたことは、寔に當然のことと云ひ得られる。

即ち防共協定は、同じ世界觀に立ちたる三國の固き握手である。

七、獨伊兩國は新世界秩序確立を目指して今、新ヨーロッパの建設に着々成功してゐる

之に反して、英佛ソ三國は、獨逸の勃興を恐るゝのあまり愈々接近せるものであつて、その傳統に見るも、その世界觀よりするも決して一致し得べからざる國々である。

斯の如き英佛ソ三國の利害關係より結ばれゆく狀勢に更に拍車を加へてこの方向を進めしめつゝ、自己の進展を志したものはコミンテルンであり、即ソ聯である。

一九三五年夏、モスクワに開催せられたる第七回コミンテルン大會の決議は、即ちそれであつて、從來犬猿曾ならざる間柄にあつた社會民主々義者との提携、共同戰線の結成は、一面對獨包圍陣を形造りつゝ、他面共產主義運動の擴大強化への途を開展しゆくの一石二鳥の策に出でたものである。

之がフランスに現れたものとしては、ブルム人民戰線内閣の成立となり、マドリツドに飛火してはスペインの動亂となつたことは説明するまでもない。

斯くの如く兩陣營の對立は、月日の進むと共に愈々その度を加へ、この間、英佛ソの陣營に對し獨伊兩國樞軸は益々強化し、遂に一九三八年三月、獨逸は埃太利を合併

し、更に同年九月にはミュヘン會議に於て、チエツコスロバキア共和國のズデーテン地方を併合するに至つた。

躍進獨逸の攻勢は更に、本年三月、ボヘミア、モラビアを保護領、スロバキヤを保護國となし、遂にチエツコ・スロバキア共和國は、この日以来、世界地圖の上よりその姿を消すに至つた。續いてリシアニア政府はメーメルを獨逸に返還した。

この間、佛ソ、佛チ、蘇チ各相互援助條約なるものが何等の作用を示さずして終焉せる事實は繰返し述べるまでもなく、之等の條約が自國中心の基礎の上に立ち、他を顧みざる舊套外交の遺物以外の何物でもないことを雄辯に物語るものである。

獨逸の、たゆまざる伸張に今更驚愕せる英國は、之が阻止のため本年三月三十一日、英首相チエンバレンをして、波蘭獨立保障を宣言せしめ、更に四月六日、英波相互協定を發表、同月十三日ギリシャ、ルーマニアの武力援助を聲明、翌十四日、ソ聯抱込みの接衝を開始せる旨發表せしめた。

若し夫れ、チエツコ崩壊前の對獨包圍陣が、フランスを主導者とする陣營なりと呼ぶならば、後者は正にイギリスを中心とする反獨逸國家群の合從連衡なりと謂ふべきである。

獨逸の進展に相應し、輝やかしき發展への途上についたものは又、盟邦伊太利である。

即ち四月十二日、アルバニアを同君聯合によつて結合し、茲に永年の宿望たるアドリア海を完全に制覇するに至つた。

續いて大羅馬帝國再建に向つての努力は、地中海諸島の武裝化に着々成功を收めて居るが、マジオルカ島の武裝化等は正にその一例といふべく、チュニス、コルシカの如きも今は既に時の問題とされてゐる。

前に述べたるが如く、英國を中心とする對獨包圍の工作は、一方、ソ佛相互援助條約と相結合して茲に英佛ソ三國軍事同盟締結交渉が喧傳さるるに至つた。

然るに、靜かに之を裏面より觀察すれば、之等三國は孰れも他國の犠牲に於て、自國の目的を達成せんとするものであつて、随つて三國の利害關係は到底一致すべき筈のものであり得ない。

されば、一度、歐洲に風雲起らんか、之等三國關係は、近きチエツコ問題の實例に照らしても自明の如く、必ずや崩壊の一途を辿るのみである。かるが故に、如何に喧傳されやうとも、三國軍事同盟の固き締結は全く不可能事と論斷すべきであつて、若し假りに三國軍事同盟成立を傳へても、それは單なる形式的協定に止まり、實質的には極めて薄弱なるものなることは前述の通りである。

ソ聯こそは、又この間の事情を熟知して居る國であり、殊にかのミュンヘン會議の苦杯を嘗めた經驗よりして英佛の要求に對しては細心の注意を拂ひ、バルチック三國並に黒海沿岸諸國に對する保障及び英佛の逃避の手段たるべき國際聯盟規約第十六條及第十七條の二ヶ條との聯携を削除せんことを要求してゐる。

歐米列強との協調外交に積極的に躍つたリトヴィノフ外相引退後、みづから外交の衝に乗出したモロトフ兼蘇外相は、嘗て三月十日第十八回全ソヴィエト聯邦共產黨大會の席上スターリンの述べた「我々は、我國が好戦者によつて紛争に巻き込まれぬやう慎重でなければならぬ。何故とならば、彼等こそ自己の利益のため他人をして火中の栗を拾はしむる常習犯である」との警句を繰返し、一は以て自らを警戒し、一は以て英佛の利己的態度への挑戦的牽制を試みてゐる。即ち五月三十一日、ソ聯最高會議聯邦民族合同會議に於て、モロトフは、

「英佛兩國は、英佛相互及び波蘭との相互援助協定によつて侵略者の直接的攻撃から彼等自身を保障し、且つ侵略者が波蘭、ルーマニアの兩國を攻撃した場合、彼等自身のため、ソ聯の援助を確保せんと努力し乍ら、一方その代償としてソ聯が侵略者から直接攻撃された場合彼等の援助を勘定に入れてよいかどうかの疑問には回答してゐない。又、ソ聯に隣接する諸小國が侵略國の攻撃に對して、自ら

その中立を防衛し得ぬと判明した場合、之等小國の保障に果して英佛が参加するかどうかの疑問にも何等回答してゐないのである。斯くてはソ聯にとり不平等極まるものと云はざるを得ない。」

と自己の利害打算の結果を明白にし、更に彼は、

「ソ聯は、西北國境に位置するラトヴィア、リスニア、エストニア三國に對する保障を得るのでなければ、中東歐五ヶ國に對する義務を引受けるわけには行かない。」

と自國の要求を主張してゐる。

縋つてフランスは、恐獨思想よりマジノの要塞に巨億の富を費し、或は對獨包圍の外交工作の一聯としてソ佛相互援助條約を結び、之を英佛ソ三國軍事同盟にまで進展せしめんと努力してゐる。これ、もとより自國のために英ソを利用せんとしたる意より出でたものであつて、何を好んで英ソのために火中の栗を拾ふの愚を敢てするの舉

に出る必要があらうか。

ヒットラー總統は數次に亘つて「西部國境を變更するの意なし」と繰返し言明してゐるが、若しヒ總統の言にして誤りなしとするならば、東歐諸國、就中、獨逸が進撃の對象としてゐるソ聯と徒らに緊密なる結合をなすの必要は、フランスには毫もない。寧ろ、ソ聯より遠ざかるに如かすとする態度が、今回の英佛ソ三國軍事同盟交渉の過程にも幾度か窺知せられる。

又、英國は、ミュンヘン會議後、特に飛躍的發展を遂げつゝある獨逸がモラヴィア、ボヘミアを併合し、スロバキアを保護國となし、メーメルを奪還する等々その間斷なき進展の姿を眺めては、只々憂慮の念に驅られ、内を顧れば立ち後れの感深き軍備に徒らに、焦躁を感ずるのみであつて、自國を生かさんがためには、此際、何としても極力ソ聯抱込みを計る以外に道無しとして只管、狂奔するの姿である。

嘗ては、ユニオンジャツクの旗幟るところ敵なく、日没することなき大英帝國と謳

はれた英國も、哀れは桐の一葉と散りそめて、今は泌みいる秋風に一入その身の落莫をなげくのみである。

さればこそ、僅かにダンチツヒ、並に東ブロイセン廻廊問題に關聯して英國が、波蘭のために立ち、國運を賭して獨逸と戦ひ、火中の栗を拾ふの愚を敢てするなどとは、又思ひもよらないことである。

之を要するに英佛ソ三國とも、スターリン及びモトロフの言の如く、「他國のために火中の栗を拾はず」、却つてこれとは逆に、自國のために他國をして火中の栗を拾はしめんとする工夫を夫々競つて居るのであつて、之が擬裝の姿こそが所謂「英佛ソ三國軍事同盟へ」なるものである。

かくの如く觀察する時、英佛ソ三國同盟なるものが如何に實質なく、如何に脆弱なものであり、空虚なものであるかゞ自ら明瞭となるのである。

之に反して、獨伊兩國の樞軸は、日と共に愈その偉力を發揮し、或は英佛を睥睨たらしめ、或はソ聯を歐洲より驅逐し、完全に三國を顛弄し來つたが、更に兩國は五月二十二日柏林に於て獨伊親善同盟協定を締結して、之により兩國の親善關係は益々その緊密の度を加へるに至つた。

その七ヶ條の全文は次の如くである。

第一條 締約國はヨーロッパ全般の情勢に影響を及ぼす如き共同の利益乃至は問題のすべてに就き意見を等しくする爲常に相互の聯絡を保つ

第二條 締約國はその共同利益が國際事件により脅威を受ける場合には直に利益擁護のため取るべき手段につき協議を開始する。一方の締約國の安全乃至はその他の重大利益が第三國により脅威を受けた場合他の一方締約國は脅威を受けた締約國に對しこの脅威を除くためあらゆる政治的並に外交的援助を與ふ

第三條 締約國の意志と希望とに反して若し締約國の一方一國乃至二國以上の第三

國との間の紛争に卷込まれた場合は他の一方は直ちにその同盟國となり、陸・海・空のあらゆる軍備力を以て締約國を援助する

第四條 第三條に定められた規定の急速なる實施を期するため締約國政府は軍事並に戰時經濟の分野に於て相互の提携を深める。締約國政府は更に本協定の各規定實施の爲必要な措置につき不斷の聯絡を保つこととする。第一第二條の目的達成のため兩國外相を委員長とする常設委員會を設置する

第五條 締約國の双方が參加した戰爭に於ては休戰並に媾和は相互に完全な意見の一致を見た後初めて締結する旨締約國は今日既に相互に誓約を了した

第六條 締約國は友邦諸國との共同關係の重要性を認識し將來もこの關係を維持し且つ締約國と友邦との結合の基礎となつた相等しき利益に従つて共同でこの關係を發展せしめるに決定した

第七條 本協定は調印と同時に効力を發生する有効期間の第一期は十箇年とし、締

約國は期限到來以前適當の時期に効力の延長に關し協議を行ふものとす

本來、獨伊樞軸は、その基調を相通する世界觀に置くものであつて、本協定全文の示す内容も、決して眼前の利害によつて左右せられることなき政治・經濟・軍事全面に亘つての緊密なる關係を條文化せるものに他らない。

この兩國の鐵の如き結合の前には、英佛ソ三國關係の如きは寔に比較にならない哀れな姿であり、而もその英佛ソ三國軍事同盟の交渉が暗礁に乗上げて居る際獨逸は、その論議の中心となつて居るラトヴィア、エストニアと既に六月七日不侵略條約を締結して英佛ソので、な、をくじき、獨逸外交の駿敏さに列國の舌を卷かしめた。

英佛ソ三國が、ラトヴィア、エストニア、リシアニア三國に對し如何なる態度をとり得るかは、將來に残された興味ある問題であると云ふべきである。バルテイツク諸國は、ソ聯の出すぎた保障は眞平だと云つて居る以上親切の押し賣りも出來まい。

更に又、ダンチツヒ並びに廻廊問題の運命を豫想する時、ポーランドは、バルチツク海への出口が獨逸によつて完全に閉塞された現實を果して何と考へて居るのであらうか。英佛に煽動せられ不覺なる態度をとつた小國の末路亦思ひ半ばに過るものがある。

八、支那事變は、新世界秩序確立を目指す新東亞建設のための

一大聖戰である

周知の如く、昭和十二年七月蘆溝橋に端を發した今回の支那事變が、我國の現地解決、不擴大方針にも拘らず何故に、蔣介石をして、戰線の擴大、長期抗戰の積極的行動に出でしめたかは、英米佛ソの強力なる援助あつたからに他ならぬ。

今や既に武漢三鎮陥ち、成都を残す以外その重要中心都市の凡てを失ひ、幹線交通路の一切を遮斷せられ、わづかに窒息を免かれ居る状態なるにも拘はらず、猶ほ且つ

頑強に抵抗を持続する所以のものは、是れ又、全く前記列國の執拗なる支援によるものである。

さればこそ、支那事變の根本的解決は、之等、背後にあつて蔣介石政權を操る列國をアジアより驅逐する以外には斷じてあり得ない。

永き期間に亘つて之等の搾取にあひ、又、赤化の對象となつて居つたアジア民衆を救ひ、燦然たるアジア固有の文化を復興し、新たなる世界文化を創造する者は、日本民族であり、新世界秩序確立を目指す新東亞建設のための支那事變は、この意味に於て一大聖戰である。

九、英米との妥協斷じて許さず

既に述べたるが如く、蔣介石政權は、徹頭徹尾、英米佛ソ依存の政權である。

我國が、新東亞建設の大旗をかざして、アジア復興の聖戰を進めれば進めるほど、

之等背後の國、英米佛ソとの衝突は、如何としても免かれ得ざる運命にある。避けんとして、又避け得ざる宿命である。

吾人は徒に、英米佛ソに對して挑戦を試みるものではない。

然るに、今日まで、我國が此の日本民族に與へられたる民族使命を進行してきた際に、英米佛ソが如何に之が妨害をなし、自國を有利に導くために凡ゆる隱險な手段を弄し、權謀術策をつくしてきたかは過去の事實が最も之を雄辯に物語り、現に支那事變を通じて、吾人にその實證を見せつけてゐるではないか。

吾人は、英米佛ソと妥協しつゝ、新東亞建設を成就し得る等とは斷じて考へられない。

英米妥協論者は、その源を經濟に出發する。我國々際經濟關係は今日まで英米依存の態勢にあつたことは説明するまでもない。

しかしながら、今や我國が從來の如く、英米依存の經濟體制を固守する限り、我國

は英米の牽制下に尙も呻吟せねばならぬ。而して、この經濟體制下に依然として我國があるならば、我國に於けるストックが涸渇すればする程、之が支配權をもつ英米の干涉の手は愈々伸びてくる。

この戰時下に、消費する資源を専ら英米の手より補充せんとする企圖は屢々英米追隨論者によつて行はれんとする手であるが、それは正に英米佛ソが待望する陷穽に陥りゆく道であると云はねばならぬ。

ダラー、パウンド・ブロックより離脱し得ぬ爲政者が若しこの支那事變解決に當るならば、その結果は必ずや英米の主張を支那事變解決にも容認しなければなるまい。斯くの如き結果は、如何にして今迄我國が拂つた犠牲が許さうか。

のみならず斯かる妥協的退却が北支滿洲或は廣く我國の國際關係に如何なる影響を齎らすかを考ふれば、誠に慄然たるものがある。

英米佛ソは、日本の發展を斷じて悦ばない。この事實は、既に述べたるが如く、過

去より現在に至つて、或はワシントン條約・ロンドン條約を締結して日本の海軍力を制限し、或は、オッタワ協定によつて我國の經濟發展を阻止し、或は國際聯盟を利用、動員して我國の大陸發展を牽制し來つたことを見れば自ら明らかである。

それにも拘はらず、我國は目覺しく勃興してゆく。

英國は遂にソ聯邦と結び、或は之と共同し、或は之と分擔し、共に支那を煽動し援助し、着々として其の極東工作を進めてきた。

かく英ソ支三位一體となつて對日共同戰線を張つてきたのが支那事變直前の極東情勢であり、遂に之が原因となつて支那事變が勃發した。

我國が支那事變解決に當つて、英米と妥協する等とは凡そ考へ違ひも甚しいものである。

妥協的態度が聊かなりとも現はるれば、英米佛ソは益々足下を見すかし干涉してくることは必然である。頻々たる租界問題、鼓浪嶼島問題、さては外蒙國境問題等は抑

々何を物語つてゐるか。最近、盛に我國を打診し、甚だしきに至つては威力偵察の舉にさへ出る有様を我國は、絶対に放置しておいてはならぬ。

吾人は、英米との妥協が斷じて不可能であることを認識し、結ばざる夢を追及し、引ずられつゝ陥穽に落ち込むことは固く慎まねばならぬ。

十、日獨伊軍事同盟への必然

今や我國は、如何なる國難があらうとも、斷乎として英米經濟ブロックより離脱するの日に到來した。

この決意は、我國經濟部門の方向は勿論、實に我國經濟政策の根本的變革を要求する。

然も此の大轉換は舊來の經濟觀念をもつてしては不可能事である。

今迄の經濟常識からすれば、此の轉換は誠に思ひもよらない大冒險である。である

から現状維持を希望し固執する社會、或は退嬰的方面が此の大轉換に反對するのである。又不可能なりと迄獨斷する所以である。

斯ることを不可能事と斷する經濟觀念を以てしては、この大轉換は全く出来ない。新たなる經濟觀念に出發することが必要とされる。

此の間の消息は、既にナチス獨逸が我々に多くの示唆と教訓とを示してゐる。

即ち、この轉換は、日本精神に基調を置く全體主義的經濟觀に立つて爲されねばならぬ。

利己的唯物主義的利潤追及の經濟觀を以てしては到底この大轉換は成就出来ない。今や歐洲に於ては、盟邦獨逸、伊太利が、新ヨーロッパ體制確立のために強力なる團結力を以て之が歴史的使命に邁進しつつある。

アジアの敵であり、日本のこの歴史的、民族的使命の妨害者、英米佛ソは、又、同時に盟邦獨逸・伊太利の敵でもある。

租界問題、鼓浪嶼島問題、天津租界封鎖問題等々次から次へと英米佛との利害問題が表面に現はれて来る。當然起る可き事件であり何等異とするに足らぬ、即ち支那事變の真相が赤裸々な姿で表れる時期が到來したのである。

政府最高首脳部に於て是れが對策を決定し矛盾無く諸般の工作を進めて行かないと現地の犠牲を大にし徒らに事件を紛糾せしめるに至るであらう。英米佛勢力に對する根本方針を決定し、對外對内諸政策を相互に矛盾なく、全く有機的統一あるものに充實させて行かなければならぬ。英國側の經濟的報復は不可能也と云ふがそれは限度の問題である。英國をしてその舉に出でしむるか否かは日本の肚一つである。現に六月二十二日付東京朝日夕刊所報に依れば、チエンパレン首相が英下院に於て一議員の天津租界問題に對する質問に答へて「日本政府の今回の事件に對する態度はまだ決定して居ない様だ」と答辯して居る。如何に出先が強硬に出ても本國が其に相應する態度體制を執り得なければ、敵に虚を衝かれ、効果を減殺せしめるばかりでなく思はざる

損失を招くであらう。舉國一致の間隙無き團結と、國家の諸部門諸機構が一系亂れず同一方向に統一せられて居る事とが戦はずして勝つ所以である。或方面では英米佛と妥協し或方面では獨伊と協調し様とする態度は全世界を敵とする結果となる。如何に自主外交とか獨自の方針とかの言葉で自己を欺瞞し様とも、それは萬邦協和に非ずして、孤立政策である。經濟的利害打算と無批判の希望とから英米妥協に向つて走る馬と政治、思想、道義の上から日獨伊三國樞軸強化に向つて走る馬と、此の正反對の方向に走る二頭の馬を兩手に操る事は、自己を破壊する所以である。

去月廿日及び今月五日の五相會議に於て對歐外交國策は決定したと繰返して聲明せられたが、近く對歐策五相會議が開かれると云ふ事である。獨伊親善同盟協定締結の手際と、英佛ソ三國同盟交渉の時間を超越した駆引とを比べ、更らに我對歐外交國策樹立に當つて今尙ほ會議に會議を重ねつゝある状態を考ふる時亦感慨なきを得ない。

嘗て日獨伊防共協定が締結された當時、世論は總じて此れに反對して居つた。然る

に僅か八ヶ月を出でずして支那事變勃發し、日獨協定が無言の偉力を發揮するや、從來の反對論はその姿を消し、その強化をすら主張するに至つた。

支那事變勃發直後、蔣介石背後の力として英ソを國民に明示せんとした時、ソ聯と云はずコミンテルンと呼び、英國と指摘せずして英米ユダヤ財閥と呼ばれたと、當局は我々に要求した。然るに現在英ソ兩國排撃の聲は全國に満ちて居るではないか。日獨伊樞軸武裝化の問題も亦然り、時局切迫せるは、日獨防共協定締結當時の比ではない。數月を出でずして其の効果を讃歎するに至るであらう。凡そ外交は機を失しては役に立たぬ。歐洲の國際情勢を検討すると共に機を見るに敏なる獨伊の出方も參考にすべきである。

國民精神總動員運動は從來屢々批判の對象になつたが、組織陣容を新にして熱心な活躍を始めて來た事は慶賀に堪へない。然し組織が如何に完備しても、又その當事者が如何に粉骨碎身の努力を致さうとも、政府最高國策が明示されざる限り、國民の琴

線に觸れた運動は出来ない。即ち國民を眞に感激せしめ此れを動員する事は到底望めない。時局認識を徹底さすにしても、敵は敵、味方は味方とはつきり示さなければならぬ。世界列強悉く我味方なりとは希望であつて現實ではない。敵味方を明示し、而もその對策を具體的に決定しその線に沿ふて諸政策を樹立し、緩急宜しきを得、内外狀勢に善處して、國民を指導し理解せしめ乍ら此れを實施して行かねばならぬ。

即ち、之を要するに我日本は、新東亞建設の大業を貫徹するため、又、同時に新ヨーロッパ建設のため、ひいては新世界秩序建設のため、日獨伊三國軍事同盟を結び、以てその民族的使命達成に一路邁進すべきである。

而もこれこそが風雲愈々急なる世界の情勢を緩和する最善の平和的手段であり、實に戰はずして勝つ最高の兵法である事を深く認識せねばならぬ。(完)

大日本防共同志會決議綱領

我が日獨同志會が、その出發を荆棘の途に選んでより、活躍の時を閑すること、既に一年有八箇月。今にして憶ふも、吾儕の進み來りし目標には、此の狂ひもなかつた。皇國は今その欲すると、欲せざるとに關せず、防共の一端を直進せざるを得ず、又現に直進しつゝあり。看よ、ナチス・ドイツと皇國との、歴史的な提携は、フアツシヨ・イタリヤの欣然たる參加を見るに及んで、更に錦上にて花を添へ、然も尙ほ國民主義に眼醒めし幾多の列強をして吾儕の輻輳陣營に、續々加盟せしめんとする趨勢となつてゐるではないか？

斯くの如くにして、吾儕同志會の所期の目的は、一應達成せられた觀がある。然れども吾儕は、この情勢に満足して、徒らに晏如たり得るものではない、吾儕はこれからだ！

吾儕の獲たりと誇り得る成果は、たゞそのふみ出した第一歩への到達に過ぎない。

現に皇國が血の犠牲を以て腐爛の聖業に携りつゝある暴支の將來を想ふ時、又刻下一觸即發の危機を孕んだ北張の妖雲を審視する時、更に又我國を繞る列強の動向を観察する時、果して吾儕の周圍には、その内治に於て、済經に於て、文化に於て將た又外交に於て、味付有の難局を切抜くるに足るべき破邪顯正の日本精神と、之に基く正しき認識の政策とが、行はれてゐるであらうかどうか。顧れば願うだけ、轉た憂慮に堪へないものがある。殊に國際思想及び經濟戰の激化は今や武力戰を伴ひ、殊はより廣範圍の武力戰に迄展開せんとしつゝあり。この時

國內思想經濟の擾亂はコミンテルンの最も狙ふところ、統後と事變後に來るべき凡ゆる狀勢を豫期して、彼等の之に對する戰略戰術は實に想像に餘りあるものがある。茲に於てか、吾儕は、在來の日獨同志會の名稱を、新たに大日本防共同志會と改稱し、一は以て國際防共の提携團體となり、又一は以て國內に於ける思想的戰團團體として、從來の防共一線に沿ふ目標に向つて、益々邁進のテンポを進めよう。

呼稱の變更と共に、吾儕の目指す目標そのものには、勿論何等の變化があつてはならぬ。吾儕はこれに依つてたゞ一層熾烈なる「戦ひ」への決意を示すのみ！

技に同志諸彦に對し、我等と偕に共に、堅き結束の協働を希望して敬まぬ次第である。

昭和十三年九月一日

日獨同志會 改稱

大日本防共同志會

大日本防共同志會聲明

我等は時局の進展に鑑み茲に日獨同志會を發展的に解消して大日本防共同志會を結成し、其の盟を約すること左の如し。

我等は聰明なる認識と強固なる團結組織とを以て人類共同の敵コミンテルンの暗躍並に之と稱撫する一切の思想・行動を、國內・國外より徹底的に掃蕩し、日本精神を皇國內外に發揚し、以て明朗なる新世界の建設を期す。

昭和十四年七月一日
昭和十四年七月五日

印刷納本
發行

【定價二十錢】

東京市芝區高輪南町二八

編輯兼
發行所
有
泉
茂

東京市神田區錦町三ノ一七

印刷者
廣
岡
正
彦

東京市神田區錦町三ノ一七

印刷所
白
鳳
社
印刷所

東京市芝區高輪南町二八

發行所
大
日
本
防
共
同
志
會

電話高輪(4)三二五〇番
振替東京一三六九一六番